

知っていてくれる

津 田 一 夫

奨励者紹介〔つだ・かずお〕

日本キリスト教団醍醐教会牧師

つくし保育園園長

慈しみをいただいて、わたしは喜び躍ります。

あなたはわたしの苦しみを御覧になり

わたしの魂の悩みを知ってくださいました。

（詩編 31編8節）

子どもたちとの出会いの中で

小さなジャガイモ三つだけれど、Nちゃん（4歳）の両手はいっぱいになりました。保育園の畑の採れたてをそおっと落とさぬように、少しだけ早足で、坂道を下ったところにある調理室に運んで来てくれました。「おいしく作ってくださ～い」「まあ、かわいいお芋。ありがとう」。うれしくなってNちゃんは三つずつ、何度も坂道を運びました。その日のお昼は、とろ～りとろけた、やさしいお味の肉ジャガです。Nちゃんはなんだか胸いっぱい。ゆっくり口に入れると舌の上で、お芋さんがにつこり微笑んだように感じました。

私たちの園は食べることに力を入れています。栄養だけでなく、どのように食べるか。自分たちで育て、運び、準備した食材で作られる日々の食事は子どもたちに大切な何かを知らせます。

神学研究科を修了して牧師になる時、まさか自分が保育園で働くとは想像もしませんでした。今は月曜日から土曜日まで保育園にどっぷり。しかし、聖書の言葉の奥深さを読み解くヒントが子どもたちとの出会いの中にたくさん隠れていることに気がつきました。

詩編31編8節の詩人は深い苦しみを抱えていましたが、今、「慈しみをいただいて、喜び躍っています」。問題が解決したのでしょうか。いいえ。では、なぜ喜んでいるのでしょうか。理由は、主が「わたしの魂の悩みを知ってくださった」から。

知っていてくれる

発達心理学者エリクソンの「基本的信頼」という言葉があります。幼児期に育まれるべき保護者に対する大切な感情、基本的信頼。今日の聖句を借りれば、「どんなことがあっても、この人はわたしのことを知っていてくれる」と思える心のことでしょう。マタイによる福音書15章でカナンの女が悪霊に苦しめられている娘を助けてほしいと懇願しますが、この日のイエスはどうしたことか、目の前の同胞イスラエルのことでも頭がいっぱい。「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」とまで言ってしまう。しかし、女は「小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです」と切り返す。この機転にイエスは、一本取られたとばかりに思わず「あなたの信仰は立派だ」。そうして娘の病気は癒されました。多少の行き違いはあ

っても、必ずこの方は私の悩みを知っていてくれる、と女は心から信じていた。信頼の力がイエスを動かしたのです。

外遊びでK君(3歳)が何かに躓いて転び、泣き出しました。近くにいた私がすぐ行きましたが、けがもなく、全く心配ありません。ただ、びっくりしたのでしょう、なかなか泣き止みません。困った私は「大丈夫だよ、けがしてないから、がんばって立とう」。いろいろ言葉をかけるが一向に泣き止む気配なし。こんな時、皆さんなら何と声をかけますか。私が困っていると、経験豊かな一人の保育士が近づいて、耳元に小さな声で「ほんとうに痛かったねえ」と、おひざをやさしくなでてあげました。すると、どうしたことでしょう。彼の泣き声は小さくなり、やがて笑顔が戻り、立ち上がり、また遊び始めたのです。どんな魔法?いいえ、魔法ではありません。彼に必要だったのは、けがのあるなしではなく、励ましの言葉でもなく、「あなたの気持ちを私は分かっているよ」と伝えてくれる人だったのです。このようにして基本的信頼は育まれるのか……。新米園長は気づきました。

信頼する力

話は変わりますが、金子哲雄さんという流通ジャーナリストを覚えていますか。「ミヤネ屋」という番組などでスーパーから実況中継し、「今はこれがお得」と最近の経済動向をおもしろおかしくレポートしていた方です。楽しくてよく見ていましたが、数年前、新聞に小さな訃報が出てびっくりしました。彼は自分の葬儀の一切を生前に準備し、会葬御礼の文面も自分で考えて、「今回、41歳で、人生における早期リタイヤ制度を利用させて頂いたことに対し、感謝申し上げます。(中略)もちろん、早期リタイヤしたからといって、ゆっくりと休むつもりは毛頭ございません!第二の現場では、全国どこでも、すぐに行くことのできる『魔法のドア』があると伺っております。そこで、札幌、東京、名古屋、大阪、松山、福岡など、お世話になったみなさまがいらっしゃる地域におじゃまし、心あたたまるハッピーな話題、おトクなネタを探して、歩き回り、情報発信を継続したい所存です」と記しました。とは言え、彼はずっとそんなに明るく過ごしたわけではありません。お連れ合いがラジオインタビューの中で、「重い肺の病気で難しいと知らされた時、彼は自分の死を全く受け入れられず苦しみました」というようなことを話していました。死後出版されたご本人の著書にも「なんで、治らない病気にかかるんだよ。仕事も順調なのに、なんで、人生のチャンスをもらえないんだよ。なんで、すぐ死んじゃうんだよ。なんで、今すぐ死ななきゃいけないんだ。俺、なんか悪いことしたか?」(『僕の死に方 エンディングダイアリー500日』小学館 2012年)と当時を綴っています。「がんばって」という友人の言葉も「自分は安全な岸にしながら溺れている人にかける言葉だ。俺はがんばらないといけない存在なのか」と受けつけませんでした。お連れ合いによれば、その中で、いつも死を間近に見送り自分も死にゆく一人であることを実感している宗教家と話した際、静かにかけられた「がんばって」という声にはなぜかゆっくり頷いていたそうです。

そんな金子さんが死の2カ月前、突然明るさを取り戻しました。自分の死をまるで明日の天気予報を話すかのように軽く話題にできるようになった。お連れ合いの押す車椅子でスーパーに買い物に行った時、免疫を高めるため食べている自然農法の人参を買おうと売場の前で生産者情報を目にしたのがきっかけでした。「ああ、僕は今までこの一本のニンジンのことすら何も分かっていなかった。どこで何が安い、効率がいい、そんなことにばかり目が向いていた。しかし、今分かった。このニンジン一本の陰には、丹精込

めてそれを育てた人がいて、彼を支える家族がいる。トラックに乗せた人がいて、運転し運んでくれた人、売場に並べた人がいる、その一人ひとりに愛する家族がいて、支え、支えられている。そんなたくさんのぬくもりをとって初めて、このニンジンは今、僕のもとに届いたんだ」。

私は一人じゃない。多くの人の温かいつながりが私を支えてくれている。金子さんが最期に再び明るさを取り戻すことができたのも、基本的信頼の力でした。

三つずつジャガイモを大切に運んでいたNちゃんはきっと将来、見えないところで人が額に汗する尊さを感じられる人になるでしょう。共感の中で育ったK君はきっと将来、友だちの痛みに寄り添うことのできる青年になるでしょう。私は一人じゃない。私のことを知っていてくれる人がいる。そうした信頼の力がいつも私たちを育ててくれます。その信頼の源泉が聖書であると、私は思います。最後にもう一度詩編を読み、祈りましょう。

慈しみをいただいて、わたしは喜び躍ります。

あなたはわたしの苦しみを御覧になり

わたしの魂の悩みを知ってくださいました。

2017年6月28日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録